

1905年、愛知淑徳女学校が誕生。70年目の1975(昭和50)年に学園は念願の4年制大学(文学部の国文科と英文科の1学部2学科の女子大学)を開学します。当初、1号棟と2号棟だけだった長久手キャンパスの建物は、2年目以降急ピッチで建設が進められ、3号棟、図書館、体育館と施設が整えられていきました。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第16回は、第3回卒業生の相木直美さんの登場です。

## 米文学のテキストで、アメリカの現状を知ることができました



愛知淑徳大学文学部英文学科第3回卒業生  
(昭和55年度卒業)

### 相木直美さん (旧姓：中川)

昭和34年生まれ。現在49歳。  
卒業後、国際特許事務所に2年半勤務。昭和59年結婚。63年から5年間、アメリカ・シカゴに滞在。子供3人を育てる傍ら、刈谷市の臨時職員として6年間勤務。その中で障がい児の福祉に興味を持ち、愛知県立安城養護学校へ。実習教員2年を経た後、常勤講師として2年目。現在、特別支援学校教員の資格取得のため、愛知教育大学の公開講座で勉強中。

高校から淑徳です。出身は武豊町で、当時はほとんどの生徒が地元  
の県立高校へ行っていました。母の知人の娘さんが淑徳に入り、とてもいい学校だという評判を聞いて受験しました。高2年の時、淑徳に4年制大学ができ、高校から推薦を受けるには成績が上位7割に入らないといけなかったため、定期テストは頑張りましたね。

母が茶道と華道を教えていたため、地元ファイザー製薬へ海外から出張に来られた外国の方と接する機会があり、英語が話せたらいいなと思っていました。それに将来、海外へ行きたいという夢があったので、英文学科を希望しました。  
入学した頃、長久手キャンパスの校舎は1、2、3号棟だけ。2年の時に食堂(緑風館)、3年に図書館ができました。食堂は眺めがよく、藤が丘の街が見渡せました。

英文科は授業の数が多く、予習が大変でした。「嵐が丘」や「ハムレット」など文学作品を読んでいく授業が多く、3年になると専門科目も増えました。英検2級は取りましたが、教職を選択したこともあり、卒論は書きませんでした。その頃は卒論を取る人は数えるくらいでしたね。  
思い出に残っている授業は堀内俊和先生の米文学です。当時、あまり知ることができなかったアメリカの現状を、教科書を通じて知ることができたんです。読むのが大変で翻訳本を買ったのですが、これは結婚後にアメリカへ行った時に持ってい

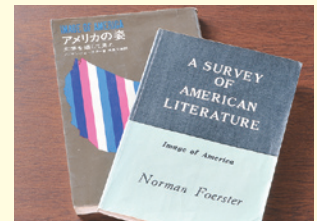


第2回大学祭の野外ステージで演奏する「キャロット」。相木さんは右から3人目



卒業式の記念写真。  
下列右から2人目が相木さん

右は米文学で使ったテキスト。左は相木さんがアメリカへ持っていった翻訳本。  
ノーマン・フォレスト著「アメリカの姿」



き、役に立っただけです。  
部活は愛知淑徳フォークソングファミリィ、通称ASFという軽音楽部に入りました。子供の頃からピアノは習っていましたが、当時流行っていたギターを弾きたいと思って。指導してくれたのは、先輩たちの高校の元同級生で、名大や名工大の男子学生。淑徳は女子大でしたから、大学から許可をもらい、教えるに来てもらっていました。  
部員は全学で40人ほどで、私はキャロットという名前の6人グループのギター担当でした。当時はフォークソングからニューミュージックへの移行期で、荒井由実や大橋純子、吉田美奈子、尾崎亜美などのコピーをしていました。学園祭の時、教室に暗幕を張って作ったフォーク喫茶や、中庭の特設ステージで演奏したり、入学式や外部のホールで演奏したこともあるんですよ。  
普段はクラブハウスの2階の部室で練習していました。その下が担任だった体育の布目先生の体育教官室で、ドラムをガンガン叩くので「うるさい」といわれ、別の部室に移ったことがあります(笑)。夏には長野県の戸狩へ合宿へ行ったり、部活は充実していました。その分、勉強との両立が大変でしたが。  
卒業後は、池坊の師範を目指して、華道の勉強を自宅と京都で続ける傍ら、近所の子供たちに英語を教えていました。そのうち、部活のメンバーが勤めていた名駅の国際特許事務所から声をかけられ、2年半勤務。結婚を機に退職し、夫の転勤でアメリカのシカゴ郊外で5年間、暮らしました。英語は耳が慣れるまで時間がかかりましたが、「淑徳魂」(笑)で、辞書を片手に「とにかく話すしかない」と、度胸で過ごしました。  
住んでいた街は日本人が少ないエリアでしたが、偶然にも淑徳の10年先輩に出会い、現地の生活習慣を教えてもらったり、いろいろなアドバイスをいただきました。子供が小さく不安なことが多かったのですが、とてもありがたかったですね。  
今は養護学校で常勤の講師をしています。生徒の障がいは一一人ひとり違うため、対応もそれぞれ異なります。日々悩みながらの仕事ですが、彼らからパワーをもらっていると実感します。とてもやりがいのある仕事です。(談)